

宮島の観光実態と振興策に関する研究

—滞在時間に着目した分析をふまえて—

M114038 吉原文雄

1. 研究の背景、目的

宮島の厳島神社は、1400年の歴史をもち、島全体が神の島として崇められ、日本三景で、自然公園法の瀬戸内海国立公園、文化財保護法の特別名勝・特別史跡、天然記念物「弥山原生林」に指定され、1996年12月、「厳島神社」の前面の海、背後の弥山原始林を含む島全域の約14%が世界文化遺産として登録されている。

宮島（町）は、2005年11月3日に廿日市市・大野町と合併、現状は、世帯・人口とも減少し、観光産業の担い手である15歳から64歳までの生産年齢人口も1985年2,012人、割合64.5%から2010年979人、55.9%に減少している。

年間約350万人以上の観光客が来島するが、一人あたりの観光消費額は、2005年をピークに減少している。観光客数が多いことが、地域の活性化という結果につながっているとは言い難い。

宮島の観光の問題は、来島する観光客の滞在時間の短さと日帰り観光客が多く、宿泊者の少なさにあると考え、宮島の観光客の実態を調査から、滞在時間の視点から詳しく分析することとした。

すなわち、観光客の滞在時間が延びることは、結果として一人あたりの消費額があがるのではないか。このことを検証することが研究の目的であり、今後の宮島の観光振興への提言につながることをねらいとしている。

2. 宮島観光の現状と課題

宮島の観光客数は、減少していた時期もあったが、2007年以降、3,000千人を超え、2012年には4,047千人を記録した。繁忙期は、紅葉期11月、夏休み8月、初詣1月、桜の季節4月で、閑散期は、2月、6月、7月、9月、12月である。

宿泊は、宮島旅館組合登録の旅館・ホテルの年間収容定員（年間約840,000人、1日換算2,300人）の宿泊稼働率は、推計で約40%の30万人程度である。

3. 先行研究と本研究における検討の視点

観光客の滞在時間に着目して、①観光客の属性・タイプ、②観光客の行動、③観光客の消費拡大の3つの側面についての研究をレビューした。

その中で、伊藤(2012)は、宮島の観光客の周遊と消費行動について実態を明らかにして、滞在時間の平均は3時間29分、一人当たり平均支出額は3,525円で、比較的滞在時間が短く、土産物の購買が中心の滞在特

性であるとしている注目すべき研究があった。

そこで、次の3つの視点から宮島における観光客の実態を調査から分析した。

- ①どのような観光客が長く滞在するのか。
- ②立ち寄り先の具体的な観光行動はどうか。
- ③滞在時間の増大は経済効果に結びついているか。

4. 宮島観光客動向調査による実態分析

広島大学大学院地域政策ゼミナールにおいて2009年11月、宮島の観光客の実態調査し、その概略結果が公表されているので、この調査データを活用した。

観光客の動向を把握するために、前述の3つの側面に関する各項目を調査した。

観光客の滞在時間は、3時間以上5時間未満が全体の45.8%を占め、主な立ち寄り先としては、厳島神社、表参道商店街、五重塔などのメインルートであった。来島者の約8割が日帰り、宿泊客はその1割と低く、1泊2日であった。

宮島における一人当たりの総消費額は1000円以上5000円未満で広島県1人当たり消費額5,433円（2010年広島県観光動向調査）と比べやや低額となっている。

5. まとめと今後の課題

滞在時間をみると、3時間程度で、観光のメインルートは昔から変わらず、消費に繋がっていない。そのため、滞在時間を延ばし、地元経済効果を高めるためにも宮島の宮島水族館方面へ新たな周遊コースを設定する。健康志向の観光客に向けたスポーツイベントを誘致する。観光関連業者と産官学が研究機関・大学関係施設を生かしたコンベンションを誘致する提案を考えた。今後は、年間を通じて、来島者の多くが、長く滞在し、宿泊したいと思える魅力ある観光地「宮島」となれる研究をすすめ、データをさらに詳しく分析し、提案の有効性を検証したいと考えている。